

Botchan Chapter 1 (Natsume Sōseki)

おやゆず むてっぽう こども とき そんな しょうがっこう い じぶんがっこう にかい と
親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び
お いっしゅうかん こし ぬ こと むやみ き ひと し
降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れ
ぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談
べつだんふか り ゆ しんちく くび だ どうきゅうせい ひとり じょうだん
に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫や一い。と囃したからであ
る。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰
こづかい おぶさって かえ き とき おお め
を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

しんるい せいようせい も きれい は ひ かざ ともだち
親類のものから西洋製のナイフを貰って綺麗な刃を日に翳して友達に見せていたら、一人
ひか 事 は 光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合
きみ ゆび きみ ちゅうもん とお みぎ て
った。そんなら君の指を切ってみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の
おやゆび こう き こ さいわい ちい ほね かた いま
親指の甲をはずに切り込んだ。幸 ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに
親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。

にわ ひがし にじゅうぼ ゆ つく みなみあ さいえん まんなか くり き
庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中に栗の木
いっぼん た いのち だいじ み じゆく じぶん お ぬ せ ど で お
が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落
ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に
かんたろう じゅうさんし せがれ い むろんよわむし くせ よ めがき の
勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗り越え
て、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。
ぬす ひ ゆうがたおりど かげ かく つら
その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上
とき に みち うしな いっしょうけんめい と むこ ふた としうえ
である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子
に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になって手が使えぬから、
むやみ ふ みぎひだり なび くる
無暗に手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦し
に 袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておい
あしがら もこ たお じめん ろくしゃく ひく
て、足搦をかけて向うへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四
はんぶんくず じぶん りょうぶん まっさかさま い
つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるとき
かたそで きゅう じゆう ばんはは わ い
に、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫びに行つた
いでに袷の片袖も取り返して来た。

この外ほかいたずらは大分だいぶんやった。大工だいこうの兼公かねこうと肴屋さかなやの角かくをつれて、茂作もさくの人にん参じん畠ばたけをあらした
事ことがある。人参にんじんの芽めが出揃でそろわぬ処ところへ藁わらが一面いちめんに敷しいてあったから、その上うへで三人さんにんが半日はんじつ
相撲すもうをとりつづけに取とったら、人参にんじんがみんな踏ふみつぶされてしまった。古川ふるかわの持もっている田圃たんぼ
の井戸いどを埋うめて尻しりを持ち込まもれた事こともある。太いふと孟宗もうそうの節ふしを抜ぬいて、深く埋ふかめた中なかから水みずが
湧わき出でて、そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであった。その時分じぶんはどんな仕掛しかけか知らぬから、
石いしや棒ぼうちぎれをぎゅうぎゅう井戸いどの中なかへ挿さし込んで、水みずが出でなくなったのを見届みとどけて、うちへ
帰かえって飯めしを食くっていたら、古川ふるかわが真赤まっかになって怒鳴どなり込んで来た。たしか罰金ばっきんを出だして済すんだ
ようである。

おやじはちっともおれを可愛かわいがってくれなかった。母ははは兄あにばかり鼻頂ひいきにしていた。この兄あにはや
に色いろが白しろくって、芝居しばいの真似まねをして女形おんながたになるのが好きすきだった。おれを見る度みたびにこいつはど
うせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云いった。乱暴らんぼうで乱暴らんぼうで行く先ゆが案じられると母ははが云
った。なるほど碌ろくなものにはならない。ご覧らんの通りとおの始末しまつである。行く先ゆが案じられたのも
無理むりはない。ただ懲役ちやうえきに行かないで生いきているばかりである。

母ははが病気びょうきで死ぬし二三日にさんちま前まい台所だいどころで宙返ちゆうがえりをしてへっついの角かくで肋骨かどを撲あばらって大いに痛うかつ
た。母ははが大層たいそう怒おこって、お前まえのようなもの顔かおは見たくないと云いうから、親類しんるいへ泊とまりに行いって
いた。するととうとう死しんだと云いう報知しらせが来た。そう早はやく死ぬしぬとは思おもわなかった。そんな
大病たいびょうなら、もう少しすこ大人おとなしくすればよかつたと思おもって帰かえって来た。そうしたら例れいの兄あにがおれ
を親不孝おやふこうだ、おれのために、おっかさんが早く死くんだんだと云いった。口惜くやしかったから、兄あにの
横よこっ面つらを張はって大變たいへん叱しかられた。

母ははが死しんでからは、おやじと兄あにと三人さんにんで暮くらしていた。おやじは何なんにもせぬ男おとこで、人の顔ひとさ
え見みれば貴様きさまは駄目だめだ駄目だめだと口癖くちぐせのように云いっていた。何が駄目だめなんだか今いまに分わからない。
妙みょうなおやじがあつたもんだ。兄あには実業家じつぎやうかになるとか云いってしきりに英語えいごを勉べん強きやうしていた。
元来がんらい女おんなのような性分しょうぶんで、ずるいから、仲なかがよくなかつた。十日じゅうじつに一遍いっぺんぐらいの割わりで喧嘩けんかを
していた。ある時とき将棋しょうぎをさしたら卑怯ひきやうな待駒まちごまをして、人が困こまると嬉うれしそうに冷ひやかした。あ
んまり腹はらが立たったから、手てに在あった飛車ひしゃを眉間まげんへ擲たたきつけてやった。眉間まげんが割われて少しょう々しょう血ち
が出でた。兄あにがおやじに言い付つけた。おやじがおれを勘当かんだうすると言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年來召し使っている清という下女が、泣きながらおやじに詫まって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえてこの清と云う下女に気の毒であった。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、かえてこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真直でよいご気性だ」と賞める事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌いだと答えるのが常であった。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云っては、嬉しそうにおれの顔を眺めている。自分の力でおれを製造して誇ってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々是小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃せばいいのと思った。気の毒だと思った。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鰐や紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時にはなべやきうどん鍋焼餛飩さえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらった。鉛筆も貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持って来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云ってくれたんだ。おれは無論入らないと云ったが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落してしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗っていた。それから口をあけて壺円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいでみて臭いやと云った

ら、それじゃお出さない、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったがり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云って人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したものでお兄様はお父様が買ってお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。負目はおそろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢っては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌いなひとはきっと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見もなかった。しかし清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思っていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云った。

それから清はおれがうちでも持って独立したら、一所になる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麹町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建も全く不用であったから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云ってまた賞めた。清は何と云っても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮っていた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思ってい

た。ほかのこども小供も一概いちがいにこんなものだろうと思っていた。ただ清なが何かにつけて、あなたはおかわいそう可哀想だ、不仕合だと無暗むやみに云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思っいた。その外ほかに苦くになる事ことは少しもなかつた。ただおやじが小遣こづかいをくれないには閉口へいこうした。

母ははが死しんでから六年目ろくねんめの正月しょうがつにおやじも卒そつちゆう中なで亡としくなった。その年としの四月しがつにおれはあるしりつ私立ちゆうがっこうの中学校そつぎょうを卒業ろくがつする。六月しゅうぎようがっこうに兄なんは商業かいしゃ学校なんを卒業なんした。兄なんは何か会社かいしゃのきゅうしゅう九州しうてんの支店くちに口ゆがあつて行ゆかなければならん。おれは東とうきよう京がくもんでまだ学問がくもんをしなければならいない。兄いえは家うを売ざいさんつて財産かたづを片付にんちけて任地しゅつたつへ出立いすると云だい出した。おれはどうでもするがよへんじかろうと返事やっかいをした。どうせ兄きの厄介せわになる気きはない。世話せわをしてくれるにしたところで、喧嘩むこをするから、向なんうでも何いとか云だい出すきまに極きままっている。なまじい保ほ護ごを受ければこそ、こんうな兄うに頭あたまを下さげなければならぬ。牛乳ぎゅうにゅう配達はいたつをしても食くつてられると覚悟かくごをした。兄くはそれから道具屋どうぐやを呼よんで来て、先祖代々せんぞだいたいの瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売いつた。家屋敷いえやしきはある人ひとの周旋しゅうせんである金満家きんまんかに譲ゆずつた。この方ほうは大分金だいぶんかねになつたようだが、詳くわしい事いっこうしは一向いっこうし知らぬ。おれはいっかげついぜん一ヶ月ぜんと以前ほうこうから、しばらく前途かんだの方向おがわまちのつくまで神田げしゆくのじゅうなんねん小川町じゅうなんねんへ下宿じゅうなんねんしていた。清いは十何年じゅうなんねん居いたうちが人手ひとでに渡わたるのを大おおいに残念ざんねんがつたが、自分じぶんのものでないから、仕様しようがなかつた。あないたがもう少し年としをとっていらそうぞくっしゃれば、ここがご相そ続ぞくが出来できますものとしきりに口説くどいでいた。もう少し年としをとって相い続まが出来できるものなら、今いまでも相い続まが出来できるはずだ。婆ばあさんはなんに何なんにも知らないから年としさえ取とれば兄しんの家しんがもらえと信しんじている。

兄あにとおれはかように分わかれたが、困こまつたのは清きよの行ゆく先さきである。兄むろんつは無い論みぶん連いれて行いける身みぶん分みぶんでなし、清しりも兄つの尻きゅうしゅうくんだにくっ付でいて九か州き下きりまで出掛もうとうける気いは毛頭ときなし、と云いつてこの時ときのおれは四よ畳半じょうはんの安下宿やすげしゆくに籠こもつて、それすらもいざとなれば直ただちに引ひき払はらわねばならぬ始末しまつだ。どうする事ことも出来できん。清きに聞きいてみた。どこかへ奉公ほうこうでもする気きかねと云いつたらあなたがおもうちを持もつて、奥おくさまをおもら貰もらいになるまでは、仕方しかたがないから、甥おいの厄介やっかいになりましよういとようやく決心けっしんした返事へんじをした。この甥さいばんしよは裁判所さいばんしよの書記しよきでまず今日こんにちには差支さしつかえなく暮くらしていたから、今いままでも清きに来こるなら来こいと二三度にさんどす勧めたのだが、清きはたとい下女奉公げじよほうこうはしても年ねんらい来らい住すみ馴なれた家うちの方がいいと云いつて応おうじなかつた。しかし今いまの場合ばあいし知らぬ屋敷やしきへ奉公ほうこう易いえをして入いらぬ気きがね兼しなを仕直しなすより、甥おもの厄介おもになる方がましだと思おもつたのだろう。それにしても早はやくうちを持もつての、妻さいを貰せわえの、来きて世話しんみをするのと云いう。親身たにんの甥すよりも他人たにんのおれの方が好きすなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買をするなり、
学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、その代りあとは構わないと云っ
た。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思ったが、例に
似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、札を云って貰っておいた。兄はそれから五十円出してこ
れをついでに清に渡してくれと云ったから、異議なく引き受けた。二日立って新橋の停車場で
分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたって面倒くさくって旨く
出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれ
るとしても、今のように人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかり
だ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割っ
て一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来
る。それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。こと
に語学とか文学とか云うものは真平ご免だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行
も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物理学校の前
を通り掛ったら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思って規則書をもらってすぐ
入学の手続きをしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起った失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から
勘定する方が便利であった。しかし不思議なもので、三年立ったらとうとう卒業してしま
った。自分でも可笑しいと思ったが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出掛けて行ったら、
四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行ってはどうだという
相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もな
かった。もっとも教師以外に何をしようとするあてもなかったから、この相談を受けた時、行
きましようと即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟ったのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して小言はただの一度も聞
いた事がない。喧嘩もせず済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であった。し
かしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、

どうきゅうせい いっしょ かまくら えんそく とき こんど たいへん とお
同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠く
へ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうぞせちな所ではあるま
い。どんなまちで、どんなひとが住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。た
だ行くばかりである。もっとも少々面倒臭い。

いえ たた きよ おりおり おい ぞんがいけっこう ゆ
家を畳んでからも清の所へは折々行った。清の甥というのは存外結構な人である。おれが行
くたびに、居りさえすれば、何くれと款待なしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろお
れの自慢を甥に聞かせた。今に学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買って役所へ通うのだ
などと吹聴した事もある。独りで極めて一人で喋舌るから、こっちは困まって顔を赤くし
た。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口
した。甥は何と申って清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分と
おれの関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に
相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

やくそく き た い みっかまえ きよ たず きたむ さんじょう かぜ ひ
いよいよ約束が極まって、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三疊に風邪を引
いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早い、坊っちゃんいつ家をお持ちなさいませ
と聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思っている。そんなに
えらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿気ている。おれは単簡に
当分うちは持たない。田舎へ行くんだと云ったら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱
れをしきりに撫でた。あまり気の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはき
っと帰る」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買って来てや
ろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と云った。越後の笹飴なんて聞
いた事もない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云って聞かし
たら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさき
ですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

しゅったつ ひ あさ せわ とちゅうこまものや はみがき
出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た歯磨と
楊子と手拭をズックの革靴に入れてくれた。そんな物は入らないと云ってもなかなか承知し
ない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれ
の顔をじっと見て「もうお別れになるかも知れません。随分ご機嫌よう」と小さな声で云っ

た。目に^め涙^{なみだ}が一杯^{いっぱい}たまっている。おれは泣^なかなかつた。しかしもう少^{すこ}しで泣くところであつた。汽車^{きしゃ}がよっぽど動^{うご}き出^だしてから、もう大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶだろうと思^{おも}って、窓^{まど}から首^{くび}を出^だして、振^ふり向^むいたら、やっぱり立^たっていた。何^{なん}だか大^{たい}変^{へん}小^{せう}さく見^みえた。